

おもいを言葉に 思い出を形に

～いちねんいちくみのおもいでをうたにしよう♪の授業実践より～

井上 陽童

1 はじめに

1年1組の子どもたちが、自分の経験をふり返りながらギターの音色に誘われるように自分の歌に合う言葉を紡ぎ出していく。自然に歌を口ずさみながら、必要に応じて歌詞を整えていく。そして、自分や友達の作った歌と一緒に歌いながらクラスの思い出をより確かなものにしていく。音楽が流れるゆるやかな空間の中で、子どもたちが言葉と向き合い音を愉しみながら個々の学びを進めていく。そんな単元の実現を目指し、本実践をスタートさせた。

2 単元の実際

(1) りさこさんの提案

単元の始まりは、5月までさかのぼる。りさこさんが朝の会の「お話してもいいですかコーナー」で、「1年1組の歌を作りませんか？」と提案した。聞いていた子どもたちは「いいねー！」と賛同する。4月からスタートした1年1組は、歌を歌うことが大好きである。毎朝日直さんが選ぶ曲を担当のギター伴奏で元気いっぱいに歌ってきた。次の活動が立て込んでいて歌わない日があると、「えー！」とすぐ不満が出た。そんな歌大好きな学級文化が育ってきた頃の、りさこさんの提案だった。私は直感的に「これはおもしろい！」と感じた。そこで「じゃあ、1学期のうちに1年1組の歌を作ろうね。」と言ってその場を閉じた。そして後でりさこさんに、「どうして1年1組の歌を作りたいの？」と尋ねてみた。すると彼女は、「みんなで色々楽しいことをしているから、それを歌にしたいの。」と話してくれた。つまり、1年1組で生まれた様々な思い出を歌として記録したいということだった。「なるほど！それは素敵なアイデアだね。」ここから私の単元構想が始まった。

(2) 学習スタート！！

それから1ヶ月以上過ぎた7月初めのある日、朝の会で今度はまなみさんが「1年1組の歌を作りませんか？」と提案した。前回のりさこさんの提案をすっかり忘れていた子どもたちが、「あっ！」という顔をする。「先生、そういえばりさこさんも言っていたよ。早く歌を作ろうよ！」もちろん私は忘れてはいない。音楽専科の齊藤教諭にも相談に乗ってもらい、1年3組ですでに事前授業をさせてもらっていた。「じゃあ、明日やろう！」そし



て迎えた歌の授業第1回目。単元名は「いちねんいちくみのおもいでをうたにしよう♪」。

まずは、「1年生になったら」の歌を元気よく歌う子どもたち。そして、私が説明する。「今回は、この『1年生になったら』の歌詞を、みんなが1学期自分がやったことをもとに、それぞれ新しい歌にしてみませんか？」すると、ゆうじが叫んだ。「替え歌だ!」「おもしろそう!」私が説明を続ける。「ただ今回は1回目なので、この歌の終わりの部分『富士山の上で おにぎりを ぱっくんぱっくんぱっくと♪』の部分进行自分なりに考えてみましょう。それから今日は1回目なので、まずはみんな同じ思い出でやってみましょう。そのテーマは『プール』です。」すると、「やったー!」とみんな大喜び。なぜなら、7月から水遊びの授業が始まり、前日も入ったばかりだったからである。そこでまずは、プールでしたことを自由に発表し、歌の作り方を簡単に確認していった。そして、説明の最後に子どもたちのプールでの様子を写真に撮ったものを配布し、いよいよ活動スタート。子どもたちは、自然に歌を口ずさみながらプールでの出来事やその時の思いを歌にしていく。そうしてできた3人の作品を以下に紹介する。

1ねんせいになったよ 1ねんせいになったよ 1ねん1くみになりました 35にんで
やりました♪

①せたがやぶうる たのしいよ そとはすごく さむいよ

②ぶうるであそんで たのしいよ ぱっしょんぱっしょん ぱっしょんばん

③ながれるぶうるで たのしかったよ すいすいすいすい すすすいすい

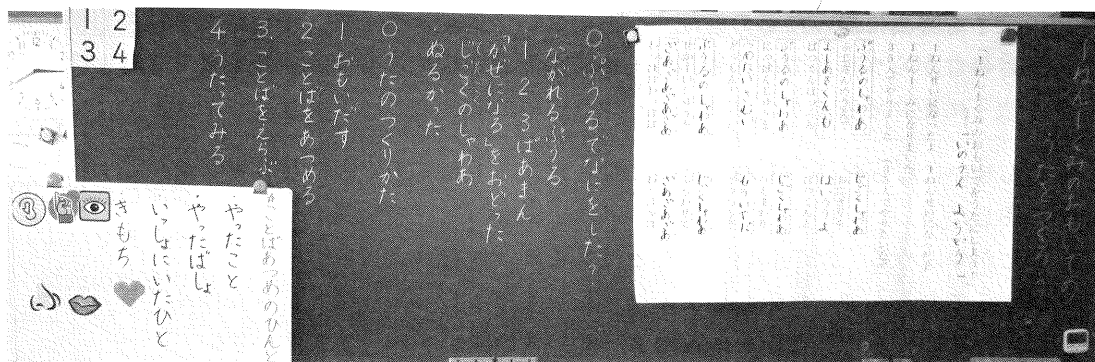
この第1時をふりかえると、子どもたちは期待通り大変意欲的に歌作りに取り組んでいた。口ずさみながらプールの思い出を歌にする過程で、言葉を吟味し取捨選択する姿が見えた。自分の作った歌をうれしそうに歌う姿があった。さらに、授業を行ってみて新たに気付いたこの活動のよさとして、完成した友達の歌と一緒に歌う姿があった。例えば、私がそばに行って実際にギターの生伴奏である子が歌い始める。すると、隣の子もその友達の歌詞を見ながら一緒に声をそろえて歌っていたのである。この姿を齊藤教諭は、「思い出を追体験しながら、共有している姿だね。」と評していた。確かに、通常を書く活動でこのような共有の仕方はあまり見られない。更に言えば、子どもたちはお互いの歌を歌いながら、歌の作り方も共有していたと考えられる。

そして、一人一人の作品を見ていくと、ある子のものが目にとまった。それは、はるくんの作品である。彼は、その時間で何と6つも歌を作っていた。そして、その6つを作る過程で明らかに作品に進歩が見られたのである。例えば、6つ目の作品は、「ぶうるのしゃわあ

てんごくだ つめたい つめたい ちべたいよ」シャワーを浴びながらキャッキゃとはしゃいでいる彼の様子が目に浮かんでくる作品である。しかも、「つめたい」をくりかえしながら、そのまま終わらない。この最後の「ちべたいよ」に、はるくんの遊び心が詰まっていると感じた。つまり、彼は多作する中で言葉の世界で遊んでいたのである。一方で、大変苦戦している子も何人かいた。彼らが何に苦戦していたかという、歌のリズムに歌詞の音数を合わせることである。例えば、自分のプールでの思い出を歌にしようとしたとき、思いついたまま歌にあてはめようとする、合わない場合がある。「富士山の上で おにぎりを♪」のフレーズに、「プールの中で風になるを おどったよ♪」と入れると、どうしても歌いづらい。

でも、その子にとってプールでダンスをしたことが楽しかったのは事実だから、この思い出を歌にしたい。思い出と歌のリズムとの間で、子どもは悩んでいたのである。が、まさにこの姿が、今回ねらっている「言語感覚を養う」ことにつながっているのだった。

そこで、2時間目以降の方向性が決まった。第一に、子どもたちにははるくんのようにどんどん多作に挑戦するよう促す。そのためのヒントとして友達作品も積極的に参考にしてよいし、配布した写真や教室の壁に掲示してある「今日のタイトル」なども活用してよいことを伝える。第二に、とにかく歌いながら作る、作ったら歌うという風に、「その歌が歌いやすいか」を考えさせる。そして、歌詞の音数と歌のリズムが合っているかを吟味させ、必要に応じて言葉を付け加えたり削ったり入れ替えたりさせる。そのためには、私がその子のそばで積極的にギター伴奏をして、その子自身に歌わせるよう努める。以上のようなことを考えた。



(3) 歌作りを愉しむ子どもたち

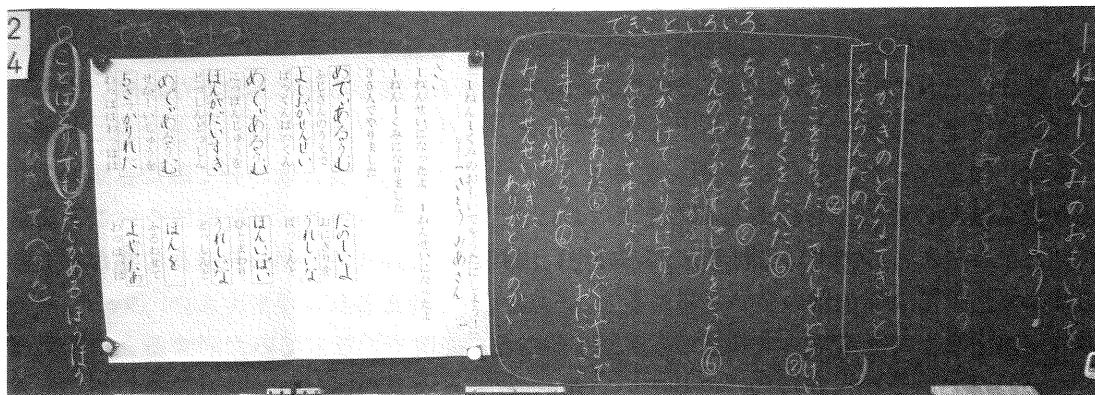
2時間目は「プール」の歌作りの続きをして、迎えた3時間目。いよいよ、りさこさん・まなみさんの願いだった「1学期の思い出」でそれぞれが自由に歌作りを行った。すでに書くことと決めていた出来事があり、口ずさみながらすぐに鉛筆を走らせる子。じっくり壁に掲示してある「今日のタイトル」を眺めながら、歌にしたいテーマを探す子。友達と楽しかった思い出を話し合いながら、書きたいテーマを探す子などなど、活動の様子は様々であった。そうして完成した歌を以下にいくつか紹介する。

1ねんせいになったよ 1ねんせいになったよ 1ねん1くみになりました 35にんでやりました♪

- ①にゅうがくのかいで おあいてさんに てをひいて もらったよ
- ②ありんこいたぞ つかまえた あげはちょういたぞ とんでった
- ③ようどうせんせい ぎたあを ひきます じゃんじゃんじゃ
- ④りれえいちい よかったよ うんどうかいは ゆうしょうだ
- ⑤めでいあるうむ ほんかりて わたしはほんが だいすき

これをみると、「子どもは替え歌の天才だ。」ということが改めて分かる。②のたかよしさんの歌は、普段の「自分の時間」に藤が池やドングリ山で夢中で虫取りをする彼の姿が目に見えてくる。同様に、⑤のなおこさんの歌も、本好きの彼女の姿を映し出す。つまり、その子らしさが詰まった歌を作っているのである。③のこうきくんの歌では、擬声語が使われ

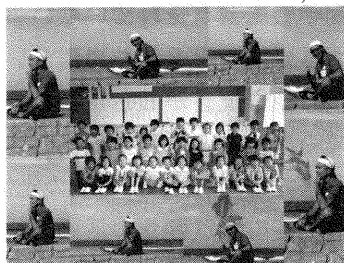
ている。今回、それまでの時間で擬声語・擬態語を特に取り立てて指導したことはなかった。にもかかわらず、擬声語・擬態語を使っている子が何人か見られたのは、次の3つの理由からだと思える。その第一は、原曲で擬声語・擬態語が使われていること。第二は、自分の歌にしたい場面を想像したとき、その場面で鳴っていた音や自分がした動作を自然に言葉にした結果。第三は、子どもたちが、友達作品に使われている工夫を参考にして作っていること。このようにして、りさこさんやまなみさんが願っていた「クラスの思い出を歌にする」という夢が実現した。35人が作った歌を並べてみると、1年1組の1学期が鮮やかによみがえってくる。そんな素敵な活動となった。



(4) 夏休みの思い出を歌にしよう♪

本単元は、この1学期の思い出を歌にしたことで、一区切りついた。しかし、この「歌作り」でつけた力が、それぞれの子の生活にどのようにつながるかを考える意味で、夏休みの真ただ中である8/8に、特別授業を行った。今回のテーマは、「夏休みの思い出を歌にしよう」。子どもたちがそれぞれに充実した生活を送るであろう夏休みだからこそ、彼らの思い出がつまった歌が生まれるだろうと考えた。ただ、1学期が終わって3週間空いてしまうことから、次の2つの手立てを講じておいた。第一は、私の夏の思い出を歌にしたものを暑中見舞いとして子どもたちに送り、歌作りの意欲を喚起しておくこと。第二は、子どもたちの思い出になった出来事を写真に収めて、当日資料として持ってこさせること。迎えた当日、驚いたことにすでに自宅で作ってきた子もいた。子どもたちは意欲満々といった表情である。そして、実際に授業が始まると、予想外の出来事が起こった。子どもたちの表情がみるみる険しくなっていたのである。さらに、できた作品もどこかしら固い。この理由について、その後の協議会で明らかになった。その1番の理由は、プールや1学期の思い出がテーマだったときと比べると、「夏休みの思い出」は当然のことながらその子だけのものであり、クラス全員の共有体験ではない。したがって、自分以外の人に歌で伝えようとしたとき、どうしても説明口調になってしまったのである。つまり、前時まで、「メロディに乗せ

しちゅうおみまい
もうしあげます
こいで、いきよく
ちくちくにいったよ
おもいでたくさん
できました
きんぐふあいやあ
やりました
かぜになるを おどったよ
らあらあらら んんんと



て言葉を紡ぐ」という遊びに似た活動だったものが、本時は「これを伝えたい！表現したい！」という学びの要素が強くなってしまったのである。「1学期の思い出」と「夏休みの思い出」に対する子どもたちの思いの違いやそれによって生じる活動のズレに、私は事前に気づくことができなかった。



ただ、そんな中であって、この学習で期待していた姿を見せてくれたのがしゅうやくんだった。彼は、これまで自分の歌にしたい思い出をメロディに乗せる時に、なかなか歌いやすいリズムに言葉を整えることができず苦労していた。本時でも私がそばに行くと、どこか納得できない様子だった。そこで、「歌ってみよう。」と呼びかけて彼に歌わせてみた。すると、どうやら歌詞の中の「おねえちゃんと♪（おにぎり♪）」のリズムが歌いにくいことに気付いたようである。でも、お姉ちゃんとの思い出だから、どうするか…。そこで私が「お姉ちゃんて、何てお名前なの？」と尋ねると、「あや。」と答えるしゅうやくん。「じゃあ、『あやちゃんと♪』で1度歌ってみよう。」ということで、改めて歌ってみた。すると、初めは首をかしげていたが、最後は「これでいいかも…」とつぶやいたのだった。こちらが助言した「おねえちゃん→あやちゃん」が本当に彼のひっかかっていたことを解決したかは正直分からない。ただ、彼が歌のリズムと歌詞の音数を合わせるために立ち止まって考える姿がまさに、「言語感覚を養っている姿」だと考えている。

（5）その後の学習活動と児童の様子

夏合宿の授業では、子どもたちのもっている「夏の思い出」への思い入れの強さと、個々の思い出が学級で共有されていない事実を踏まえることができず、子どもたちに難しい活動をさせてしまったという反省があった。そこで、夏休みが終わったの次時（本単元の最終時間）では、9月2日から来ていた「教育実習生の先生との思い出」をテーマにして、歌作りの活動を行った。その結果、クラス全体の様子としては、今までで一番の盛り上がりを見せた。さらに、個々の作品も一番の充実ぶり（最多で9作品、1人平均4～5作品）であった。その理由として3つ挙げられる。



第一は、実習生の先生方と過ごした楽しい日々の思い出が子どもたちそれぞれにいくつもあり、しかもその思い出を学級のみんなでも共有しているということ。第二は、思い出の中心となっている実習生の先生方が参観しているということ。第三は、歌作りの活動も6回目を数え、子どもたちがこの活動に習熟してきたことである。前述したように、この時間は教育実習生が授業参観をしていた。よい意味で先入観のない彼らの率直な感想を記しておく。

◇F実習生の日誌より

9/20（金） 最終日の今日は、陽童先生が今取り組んでいる替え歌を利用した国語の授業を見学させていただいた。この授業は、子どもの思いを大切にしながら、それぞれの言葉集めや語彙力を増やしていくのに有効な教材（題材）だと思った。一つ目は、写真やそれぞれの頭にある「残像＝絵」を言葉に変換しているという点にすごく意味があると感じた。一年生の言葉でその「絵」を表していく練習というのが楽しくできるというのはすごく魅力的だな、と感じたし、子どもたちの目も輝いていた。そして、もう一つ歌のリズムに合わせて言葉を入れていくというところが、絵日記やスピーチとは違うところなのではないだろうか。限られたリズムの中で、いかに合うような言葉をはめられるかというところを子どもたちはすごく思考していたように感じた。そこで、子どもたちが有効に使っていたのが擬音語である。例えば、まとあてゲームについて書いてある子は、「ばったん ばったん ばったんと」などとその子独特の表現で表していた。この擬音語が出てくる前に、歌のリズムという制限があったからこそ考えられた言葉なのではないかと感じた。

3 成果と課題

以下に3点あげる。

①「輝いている自分に触れる」「自分の経験した出来事の価値に触れる」

「プール」や「実習生の先生との日々」など、クラスみんなでの思い出が積み重なったときにこの活動を行うことで、自分なりの思い出を深くふり返ったり、友達の思い出に触れて新たな視点を得たりしていた。

②「歌を通した学び合いの場の設定」「学び合いの中で育まれる他者意識」

クラスで歌を歌うとき、子どもたちは自然と声を合わせる。声を重ねる。その活動自体がすでに他者を意識したものである。また、歌作りににおいては、こちらが働きかけずとも隣の子と相談したり一緒にお互いの曲を口ずさんだりする姿が自然発生していた。

③「学びながら遊ぶ子と遊びながら学ぶ子を見極めと、それぞれの個に応じた手立て」

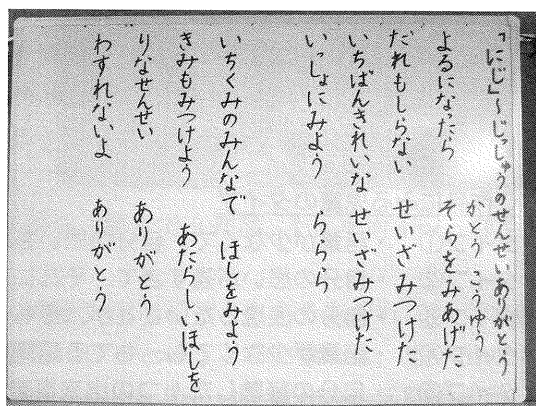
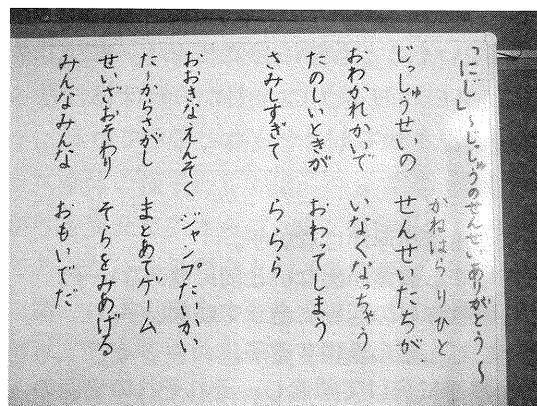
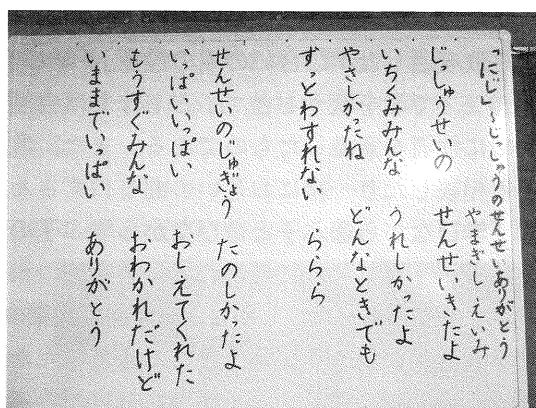
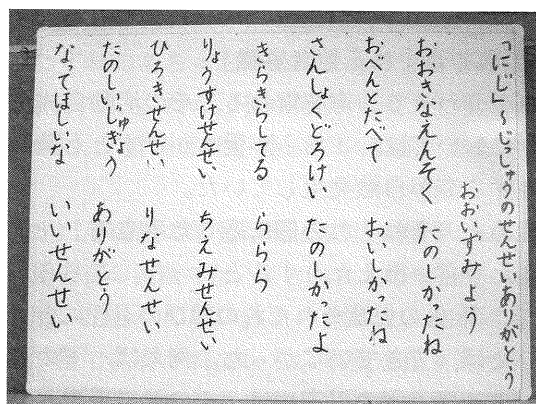
メロディやリズムに導かれて、言葉をつかまえたり言い換えたりするといった、こちらが期待する姿があった。しかし、全6回の授業の中で、35人の児童それぞれの学びの過程に合った学習活動の場や支援が十分にできていたかといえば、できていなかった。例えば、下の表のように児童の作品をタイプ別に分けてみると、タイプ①②の児童には、その子の表現したいことに関わる言葉を集める、などの活動も状況によっては必要だった。つまり「設計図」を作ってから歌作りに向かう、という過程を踏ませていくことも時に必要だった。また、タイプ③の児童には、今回の歌作りの活動と並行して「あのねちょう」（9月からほぼ毎日行っている日記）などの書く活動で、存分にその思いを表現させてもよかったと考えている。

◇作品にみる児童のタイプ

- タイプ① ・語彙が少なく、自分の思いを表現する言葉が浮かばない子。
- タイプ② ・自分の思いが強すぎて、それにぴったりする言葉が出ないと前に進めない子。
- タイプ③ ・自分の表現したいことが、そもそもこの歌作りの活動に合っていない子。
- タイプ④ ・語彙が少なくても、もてる語彙を使ってどんどん表現する子。
- タイプ⑤ ・自分の経験した1つの出来事を細かい場面に分けて想起し、それぞれの場面の行動や様子を表現する子。
- タイプ⑥ ・擬声語や擬態語も使いながら、自分の思い出を豊かに表現する子。

4 結びにかえて

10月の初めに、大変うれしい子どもたちの姿があった。後期の教育実習生との別れが近づいたある日、はるとくんが私のところに来て、「先生、後期の実習生の先生のありがとうの会で歌う歌なんだけど、りな先生が『にじ』が好きだって言っていたから、『にじ』の歌詞をみんなで作りたいたんだけど。」願ってもない提案である。そこで私は、「なるほど！じゃあ、実習生の先生方がいないところでみんなに呼びかけてみようよ。」と彼に伝えた。そして、実習生がちょうど不在だった帰りの会ではとくんがそのことを呼びかけたところ、クラス全員が「いいねー！」と賛成したのである。実習生の先生には内緒ということで、宿題でやってくることになったのだが、結果は、35人全員が作品を作ってきた。そして、10月10日の後期実習最終日、1年1組では予定通り「実習生の先生ありがとうの会」を行った。子どもたちの歌の中から私が選んだものを4つ、会の冒頭にみんなで歌った。子どもたちの心のこもった歌声に誘われるように、実習生4人がぼろぼろと涙を流していたのが大変印象的だった。



◇参考文献

(1) 東京都青年国語研究会編「子供の言語生活に根ざしたことばの学習」 東洋館出版社 2001年